

仔犬は、おふでが貰って来る山羊の乳のお蔭で、見違えるように元気になった。長屋の住人として仲間に入れて貰えることになり、先々の心配も無くなった。

仔犬の心配は無くなったが、長屋にはちよつとした問題が起っていた。

おかつの隣に八重という名の若い後家が暮らしていた。

おふでやおかつの話によると、一年前に亭主が急死したあと、亭主の仕事先だった扇屋から内職の仕事を回してもらい一人で暮らしている、ということだった。

ただ、この亭主が亡くなった後に借金が残ったという。その取り立てらしい男が、数日前からちよくちよく八重の家にやって来るようになった。

八重を脅すような声が、おかつの家まで聞こえるのだそうだ。

「気の毒だけど、立替えられる金なんてうちに有るわけは無いし・・・」と言っておかつは、仔犬を取り囲んでいるおふでやちえに向かつて首をすくめた。

「毎日きまつて仕事に出てる風だったのに、一体何の借金だったんだろうね」

「何でも、橋立の方に亭主の育ての母親がいて、病身だとか言ってたようだから、ひよつとするとその治療代にでも

いり用だったんじゃないかね」などと、おふでとおかつが話していると、通りを渡って長屋の路地に向かう人影が見えた。大店の主人といった風情できちんと羽織を着ている。羽織を着てはいるが、歩いている姿はどうも商人のようには見えない。

肩が上がって首が前に落ち、腕組みをした目つきは半眼で周囲を窺うように鋭い。

「噂をすればなんとやら。あいつだよ、八重さんの所へ来る奴は」とおかつが言った。

男は、洗い場で立ち話をしているミチ達を一瞥したが、四人の視線を気にする様子も無く、八重の家に入っていった。男の姿が戸口から消え、戸を閉める音がすると、おかつは忍び足で自分の家の前を通り過ぎ、八重の家の戸口の手前で壁に張り付いた。おふでとちえも続いた。

時々男の野太い声が、仔犬を抱いているミチの所まで聞こえたが、何を言っているのか、中身までは分からなかった。

やがて乱暴に戸が開く音がして、男に腕を引っ張られた八重が外に出て来た。

とつさにおかつが声を上げた。

「八重さんをどうする気だい」そう言われた男はおかつをじろりと睨むと

「見世物じゃあないんでね。あんたがたには関わりの無いことですよ」と平然と返した。

「八重さんは同じ長屋の住人なんでね、大いに関わりがあるんだよ」とおふでが続けた。腰が半分引けている。

「そうですか。関わりがあると仰るのなら、この人の借金を代わりに払って貰いましょうかね。私共もこれが商いなんですね、どなたでもいい、代わりに払ってくれさえしたらそれで結構なんですがね」そう言われたおふでは、次の言葉が何も出て来なかった。

ちえは二人を分けて前に出ると

「借金のかたにこの人を連れて行って、一体どうしようつてのよ。返答の次第によつちやお奉行所に訴え出るよ。まさか女衞じゃあるまいね」そう言つて男の顔を見据えた。言われた男は急に言葉を荒げると

「大人しくしてりやつけ上がりやがつて、こつちにはちゃんとした証文が有るんだよ。金が払えねえというから連れていくんだ。おめえ達も金が無いならそこをどきやがれ！」と、男の行く手を塞ごうとするちえの肩をこづこうとした。その手を振り払つてちえが続けた。

「その証文とやらを見せてもらおうじゃないの」

言われた男は懐から一枚の紙を取り出して広げて見せた。そこには確かに、八重の亭主文吉の名前で五両を借用する内容が記されていた。

「どうですか皆さん。これでも文句があるのか！」と、男が女達を狙見つけた時、腕を掴まれたままの八重が声をあげ

た。

「それは変です。うちの人は字が書けないのです。あたしが時々教えていましたが、とてもこんなに整った文字は書けません」

そこへ、いつの間にか傍に来ていた、仔犬を抱いたミチが男に声をかけた。

「石見の人ですね。あなたの背後に苦痛に歪んだ顔が見えますよ。亡霊のようですが、まだこれ以上罪を重ねますか？」

「何だ、てめーは。妙なことを言うじゃないか」

「ご覧の通りの尼僧です。どうやら凶星のようですね。石見で罪を犯して此の地へ隠れたが、その時手にした悪銭がそろそろ底を尽き始めた。するとまたぞろ悪の虫が騒ぎ始めたということでしょう。ところが八重さんのご亭主は字が書けなかった。これはとんだしくじりだったですね」

「ふざけるな！代筆して貰つて俺の所へ金を貸してくれて来たんじゃないか」

「そうですか。それでは、その代筆をした人を此処に連れて来て下さい。すぐにですよ」

言われた男は、顔を怒りで真っ赤にして叫んだ。

「おーっ。待つてろよ！」

「待つていますよ、お役人と一緒にね」

男は、八重の腕を、まるで物を投げ捨てるように振り離すと、地団駄を踏む激しさで肩をいからせ通りの向こうへ去つ

て行った。

「おー怖！あいつが代筆をした人を連れて来たらどうなるの？やっぱり八重さんは連れて行かれるんじゃないの？」
おふでが青ざめた顔でミチに聞いた。

「来ませんよ。見ませんでしたか？何かを道の脇に投げたでしょ。あれは多分役に立たなくなった証文ですよ。恐らく、文吉さんが亡くなられて、八重さんが女一人で暮らしている話を、何処かで耳にして考え付いた悪企みですよ」

「それにしても、どうして石見の人間だと分かったの？」
とちえが聞いた。

「根付けです。あの根付けは石見の物です。この辺りの人はああいう根付けを使いませんね。特徴があるのですぐに判りました。」

「へー、あの間に根付けに目が行くとは驚いた。石見で悪い事をした人間だと判ったのは何故？」

「それは半分感で、少し鎌をかけてみました。多分人を殺しているかも知れませんか。ひるんだ顔を見せました。そそくさと町を逃げ出すに違いありません。ちよつとお芝居をしてみました。」

「へーエ。ミチさんて、大した役者だわ。さっきの男の上を行ってる。」

女共の笑い声がいつまでも長屋の路地に聞こえている。仔

犬はミチの腕の中で、何も知らずに眠っていた。